

確かに、もし高橋社長(前出)の市長への要請を市が受け入れ、国に意見を挙げていたら、少しは違っていたのかもしれない。

●一番危ないのはがれき周辺で暮らす住民

さて、永倉さんが「危ないのはこれから」と語るのには、もう一つの理由がある。被災地の今の瓦礫の山は「第1次仮置き場」と呼ばれ、何を運んでもいいのだが、年内には、ここから「可燃物」「プラスチック」「廃コンクリート」など資源ごとに分別して、県の管理下にある「第2次仮置き場」へと移動する。

「このとき、瓦礫の山からきちんと、スレート材などアスベスト製品を分別できるかが課題です。それができれば被害を最小限に抑えることができる」(永倉さん)

あの瓦礫の山での分別には長い時間がかかるが、「住民のためにやるべきだ」と主張する人がいる。

仙台市の「仙台錦町診療所・産業医学センター」の広瀬俊雄医師は、夕方の診察終了後は、診療所2階に事務所を置く「アスベスト問題対策宮城センター」で市民運動家として活動する。70年に医師になって以来、一貫して、じん肺などの職業病、過労死などに携わってきた広瀬医師は今回のアスベスト問題をこう見ている。

「作業員やボランティアよりも危ないのは、瓦礫の周辺に1日24時間住む住民です。特に、在宅時間が長い就学前児童や高齢者です。マスク着用は絶対必要。ただ、瓦礫仮置き場からのホコリを誰かが吸ってしまうのも事実。だから、**今から『記録』をつけることです。その日の天候、風向き、歩いた場所などを記録するのです**」

広瀬医師には計画がある。被災地の瓦礫の山の半径1キロの住民を登録した上で、3年間に及ぶ健康影響調査の実施だ。住民の「記録」づけの協力が必要だが、「こういった疫学調査を今からやらないと、被害が出たら泣き寝入りするだけ」(広瀬医師)なのだ。

さて、取材の最後で、私は当たり前の事実気づき愕然とした。瓦礫が全国に散らばることだ。

岩手、宮城、福島県では約2300万トンの瓦礫が発生した。瓦礫1トンにつき数万円の引取り料金を得られるためか、同意する自治体もある一方、この性急なやり方に、反発する自治体も現れ、住民の反対運動も起きている。

瓦礫は今後、第2次仮置き場に移動する。次いで、受入れ表明した自治体に数年を

かけて移動し、焼却、埋め立て、はたまたりサイクルされる。だが、**焼却炉のフィルターしだいではアスベストはすり抜け地域に散らばる。**